日独 E タンデム授業
―実践報告と今後の課題―
(Japanisch-Deutscher E-Tandem-Unterricht: Praxisbericht und zukünftige Herausforderungen)

高邑ツォルネック真弓　Takamura-Zorneck, Mayumi
（Universität Regensburg　レーゲンスブルク大学）

要旨 / Zusammenfassung

レーゲンスブルク大学では、2017 年夏学期から獨協大学外国語学部ドイツ語学科との日独 E タンデムの授業を毎年実施している。本稿では、2023 年までの過去 7 回の授業と 3 回分の授業アンケートを振り返り、タンデムを成績が付き、単位が出る授業として成立させる方法や、教師の役割、また問題点や今後の課題などについて考えていく。

タンデムの相手は初回の自己紹介を元に希望を出してもらい、教師が決めているが、必ずしもいつもうまくいくわけではない。お互いの言語レベルが低すぎると、うまく会話が成立しない。また、片方のレベルが高すぎると、優位な言語ができてしまい、言語によって使用する時間を決めていても、ついそちらの言語を話してしまうことがある。このことから、参加する学生の最低限のレベルを設定し、タンデムの組み合わせにおいても相互のレベルを考慮する必要がある。

次に授業形式についてだが、学生を 1 つの教室に集めて、タンデムする際の利点は、機器のトラブルにすぐに対応でき、相手側の欠席者の穴埋めを留学生にしてもらうことができる点にある。しかしながら、1 つの教室だと周りの声が邪魔になり、相手の声が聞こえにくいという問題点もある。完全にオンラインで行うタンデムは、静かな環境で相手に集中できる反面、インターネット環境が悪い場合には、その日のタンデムができなくなることもあり、せっかくの授業に参加できなくなるという問題がある。

この授業では日本側もドイツ側も成績を付けている関係上、最後に発表が設けられているが、その際の原稿を誰が、どこまで修正するかも毎回課題となっている。全く手を付けないと、意味が通じない発表になってしまい、手を付けすぎると、本人のレベル以上の発表になってしまうというジレンマがある。

An der Universität Regensburg wird – neben der außeruniversitären Möglichkeit unter japanischen Austauschstudierenden Tandempartner zu finden – seit dem Sommersemester 2017 jedes Jahr ein japanisch-deutsches eTandem mit den Studierenden des Fachbereichs Deutsch als Fremdsprache der Dokkyo-Universität angeboten. In diesem Aufsatz wird auf die sieben vergangenen Kurse und drei Umfragen bis zum Jahr 2023 zurückgeblickt, um zu untersuchen, wie man das Tandem zu einem Kurs machen kann, der mit Noten und Credits bewertet wird. Es wird auch auf die Rolle der Lehrkraft, mögliche Probleme und zukünftige Aufgaben eingegangen.

Beim ersten Mal geben die Tandempartner auf Grundlage der ersten Selbstvorstellung ihre Partnerwünsche ab, wobei die Lehrkraft die endgültige Entscheidung trifft. Dies klappt nicht immer problemlos. Wenn einerseits das Sprachniveau beider Partner zu niedrig ist, kann keine erfolgreiche Konversation zustande kommen. Sollte jedoch andererseits das Niveau eines Partners zu hoch sein, kann es passieren, dass eine Sprache die Konversation dominiert. Selbst wenn zeitlich festgelegt ist, wie lange eine Sprache jeweils verwendet werden soll, wird dann häufiger ausschließlich die dominante Sprache verwendet. Daher ist es wichtig, ein Mindest-Sprachniveau für die Teilnehmer festzulegen und das Sprachniveau beider Partner bei der Bildung der Tandem-Gruppen zu berücksichtigen.

Als nächstes zur Unterrichtsform: Wenn die Studierenden alle in einem Raum zusammenkommen, besteht der Vorteil darin, dass der Dozent bei technischen Problemen schnell reagieren und bei der Abwesenheit eines Partners die Lücke füllen können, indem sie zum Beispiel einen Austauschstudierenden einspringen lassen. Allerdings kann es bei der Nutzung eines gemeinsamen Raumes auch problematisch werden, wenn Umgebungsgeräusche stören und somit die Stimme des Partners schlecht zu hören ist. Ein vollständig online

durchgeführtes Tandem ermöglicht zwar eine konzentrierte Kommunikation in einer ruhigen Umgebung, doch wenn die Internetverbindung schlecht ist, kann es vorkommen, dass das Tandem an diesem Tag nicht stattfinden kann und die Studierenden an der jeweiligen Unterrichtseinheit nicht teilnehmen können.

In diesem Kurs werden sowohl auf japanischer als auch auf deutscher Seite Noten vergeben. Aus diesem Grund wird am Ende des Kurses eine Präsentation abgehalten. Es ist jedes Mal eine Herausforderung zu entscheiden, wer das Manuskript wie ausführlich korrigieren soll. Wenn man überhaupt nichts korrigiert, ist die Chance groß, dass die Präsentation unverständlich ausfällt. Wenn man jedoch zu viel korrigiert, besteht das Dilemma, dass die Präsentation auf einem höheren Niveau als dem eigentlichen Niveau des Sprechers gehalten wird.

1　はじめに

ドイツの大学における日本語教育では、お互いの目標言語を母語とする者同士（ドイツ語を学ぶ日本語母語話者と日本語を学ぶドイツ語母語話者）で言語交換するタンデム（Tandem）をすることが推奨されることが多い（高邑ツォルネック 2021）。大学によっては、大学構内の掲示板を活用したり、学生会などがタンデムパートナーを紹介したりしている。また、最近は、オンラインで学生自らタンデムパートナーを探していると聞く。

言語学習におけるタンデムの定義を Bechtel（2003: 15）から引用する（筆者訳）。「母語の異なる二人の学習者が一緒になり、互いに言語の習得を助け合う。それぞれの母語は相手の目標言語である。各自が外国語を練習し、互いにタンデムパートナーの言語学習（自分の母語）の手助けをする。」

また Bechtel は個別のタンデム（Einzeltandem）とタンデムコース（Tandemkurs）の違いについても言及している。個別のタンデムは母語の異なる二人が授業外の自由時間に会い、外部から教育方法論的なコントロールがないものである。タンデムコースは母語が異なり、人数が同数の 2 つのグループが機関の枠組みの中でコースに参加する。コースを率いる教師（Kursleiter）により教育的な計画や内容の詳細が決められる。

タンデム学習の実践は 2000 年以降、様々な国、大学で実践されている。実際に二人が会って行う対面タンデム（Face-to-face-Tandem または Präsenztandem、Brammerts（2006: 4））だけではなく、インターネットやツールの普及に伴い、本稿のようにオンラインで行う E タンデム（eTandem または Distanztandem, Brammerts（2006: 4））も行われている。

レーゲンスブルク大学には、語学センターの日本語コースしかないが、授業外で行うタンデムを推奨しており、講師自ら日本人留学生との橋渡し役になり、タンデムパートナーを仲介している。ただし、上記の個別タンデムの定義にも書かれているが、講師の役割は仲介までで、それぞれの言語を半分ずつ時間を区切って行うことを推奨する以外には、実際にやることや、話す内容には口出しをしていない。また、それ以外に毎週木曜日の夜に日本語交流会（Japanisch Stammtisch）

を開催しており、学生が希望すれば日本語母語話者との交流ができる環境にある[1]。プライベートで行う個別タンデムや交流会への参加も学生にとっては学びのある意味のある活動だと考えられるが、コースとしてのタンデムは教師が相手のレベルやテーマなどを教育的な理由で選ぶことができるので、個別タンデムとは違う学びがあると考えられる。本稿では、タンデムコースの一例としてレーゲンスブルク大学の実践を報告していく。

2　先行研究

Brammerts（2006: 3）はタンデムにおける自律学習について次の条件を満たしていることが前提だとしている。（筆者訳）

・二人が各自の興味に基づいて互いにやり取りをしようと思い、やり取りできること。
・その際、相手から学んだり、共に学び合ったりする。学習するのは言語、及び、パートナーの文化的背景、またはその他の知識や能力に関するものである。
・二人は学習パートナー関係を結び、それぞれが同じように目標に向かうパートナーを支える心づもりができていること。（相互関係の原則 Gegenseitigkeitsprinzip、またはパートナー関係の原則 Partnerschaftsprinzip）。
・このパートナー関係において、両者はそれぞれ自身の学習に責任を持ち、自分で目的や道のり、評価を決める。（オートノミーの原則 Autonomieprinzip、または自律学習の原則 Prinzip des selbstgesteuertes Lernens）。

大河内（2011）では、夏季休暇中に集中講義としてのタンデムコースを実施し、5 年分のアンケート調査をまとめている。日本人学生達はタンデムをしながら「ドイツ人との交流の楽しさ」を実感し、何度も受講するリピーターが多数いたとある。林・杉原ほか（2013）ではハンブルク大学と神戸大学の学生との Skype を使用したタンデム授業の実践報告をしている。日本語学習者の方がレベルが高いといった参加者のレベル差や、欠席者がいた際の対応など課題も多数挙げられている。林（2015）では、上記の実践とそれ以外にフランスとの遠隔共同授業の例を挙げ、遠隔授業の利点や問題点、授業形態について細かく提示している。宮下（2016）は対面でのタンデム希望者を募り、授業外で自由なやり取りをさせ、アンケート調査を行い、タンデムの実態を把握しようとしている。小西（2021）では、英語を学習する日本語母語話者とオーストラリアで日本語を学ぶ英語母語話者（英語能力の高い非母語話者も含まれている）とのビデオチャットによる E タンデムを録画し、分析した結果をまとめている。オーストラリア側の参加者はボランティアとして参加しており、テーマが決められていない自由なやり取りだったので、うまくいかないペアもあったそうだ。

1　2020 年 3 月からのコロナ禍におけるロックダウンで交流会は 2022 年夏学期まで約 2 年間開催できなかった。現在はまた毎週開催している。

脇坂（2013）ではメールのやり取りと Skype による E タンデムの一例を紹介し、ドイツ人日本語学習者の動機がどのように変化したのか、また変化した要因は何かを分析している。脇坂（2016）では E メールと Skype、または Skype のみを利用し、タンデムを行っている。2 週目まではテーマが決められているが、3 週目以降は参加者が内容を決める。このタンデムの特徴はタンデムを円滑に進めるために、事前にガイドラインが作成され、参加者に配布されていることだ。

小林（2016）では先行研究を分析し、タンデム学習の定義を「教える・教えられる」で説明するべきではないと指摘している。

佐藤ブリューゲル（2019）では、Moodle を使用したメールのタンデムを紹介している。様々な制約から「話す」タンデムではなく「書く」タンデムにしたとのことだが、学生からは好評で、日本語学習面、また相手の文化などを知ることにもつながったという。

浜津（2019）では、本稿の相手校である獨協大学の Raindl 先生とのオンライン・タンデム・プロジェクトを紹介している。4 回のビデオ会議の間に、各ペアのビデオチャットを挟み、チャット後は報告書の提出を義務付けていた。アンケート結果からはビデオチャット、ビデオ会議から学んだこととして共に「社会的文化的知識」「日本語の運用に対する自信」が挙げられた。また、ブログ執筆活動も行い、「書く」力が付いたと学生たちは実感していた。

3　レーゲンスブルク大学における日本語コースの概要

レーゲンスブルク大学には日本学（Japanologie）はなく、言語コミュニケーションセンター（Zentrum für Sprache und Kommunikation）の中の Studienbegleitende Fremdsprachenausbildung（いわゆる一般教養としての外国語教育）部門の 17 言語の中の 1 言語として日本語があり、アジア言語（中国語・韓国語）で唯一 UNIcert®[2]を実施している。長期休暇中の集中講義の際などに、非常勤講師を採用することはあるが、講師は基本的には常勤講師 1 名である。

下記の表 1 はレーゲンスブルク大学で 2023 年現在開講している日本語コースの一覧である。『みんなの日本語初級』や『できる日本語中級』といった教科書を使用した文法や漢字、語彙を教える総合日本語のクラスが A1.1 から B2.2 まで 8 レベルあり、それらのコースは UNIcert に準拠するコースである。タンデムコースは、2023 年現在 UNIcert に該当しない唯一のコースである。[3]

2　ドイツ国内の UNIcert®実施大学で、各レベル（A2 以上）を修了すると、言語知識を証明する認定証明書が発行される。参照：https://www.unicert-online.org（2023 年 12 月 28 日）

3　以前は「読む・書く」「話す・聞く」「発音」などのコースも提供していたが、A1 の参加人数が大幅に増え、A1 レベルを 2 クラスずつ提供しているため、講師の授業数制限の関係から 2022 年/23 年冬学期以降「タンデムコース」以外は開講できていない。

表 1　レーゲンスブルク大学日本語コース概要

コース名	UNIcert®のレベル	コマ数	使用教科書	課の配分	開講学期
A1.1	UNIcert® Basis	3 SWS[4]	『みんなの日本語初級』	1 課～8 課	冬学期
A1.2	UNIcert® Basis	3 SWS	『みんなの日本語初級』	9 課～15 課	夏学期
A2.1	UNIcert® Basis	3 SWS	『みんなの日本語初級』	16 課～23 課	冬学期
A2.2	UNIcert® Basis	3 SWS	『みんなの日本語初級』	24 課～30 課	夏学期
B1.1	UNIcert® I	4 SWS	『みんなの日本語初級』	31 課～40 課	冬学期
B1.2	UNIcert® I	4 SWS	『みんなの日本語初級』	41 課～50 課	夏学期
B2.1	UNIcert® II	4 SWS	『できる日本語中級』 『日本語生中継初中級』	2 課ずつ	冬学期
B2.2	UNIcert® II	4 SWS	『できる日本語中級』 『日本語生中継初中級』	2 課ずつ	夏学期
タンデムコース	―	2 SWS	なし	―	夏学期

タンデムコースを始めることにしたきっかけは、2015 年夏学期から語学センターのコースに Auslagenersatz（支出補填）[5]が再導入され、語学コースへの参加にお金がかかるようになったことである。ドイツの大学は学費がかからないところがほとんどだが、レーゲンスブルク大学の学生にとっては、語学の授業を取ると、お金がかかることになり、UNIcert の証明書が取得でき、B2 レベルの授業まである[6]総合日本語以外の授業に人が集まりにくくなってしまった。そのため、学生を集めるために、より魅力的なコースづくりが必要になり、日本語クラスに関してはハンブルク大学と神戸大学のタンデムの取り組み（林・杉原ほか 2013）にヒントを得て、タンデムの授業をスタートさせることにした。

それまでもレーゲンスブルク大学では、前述のように教師が学生たちに日本人留学生を紹介し、タンデムを奨励していた[7]が、授業として扱ったことはなかった。総合日本語の各コースで毎学期末に行っていた授業アンケートでも「（自然な）会話の練習をしたい」という要望は多く、タンデムを授業として成立させることで、それに応えることができるとも考えた。

4　SWS = Semesterwochenstunden, 1 SWS = 45 分。例えば、3 SWS のクラスでは（ドイツの Kalenderwochen による）偶数週は 90 分週 2 回、奇数週は 90 分 1 回と変則的なリズムで開講している。

5　日本語のコースの場合、A1、A2 レベルで 1 学期 37.50 ユーロ、B1、B2 レベルで 50 ユーロかかる。また、タンデムコースへの参加は 1 学期 25 ユーロかかる。

6　レーゲンスブルク大学では UNIcert に準拠しない言語のコース（英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語以外）は A2 レベルまでのコースが多い。

7　4.6 で後述する授業アンケートによると、タンデムコースを受講時に授業外でタンデムパートナーがいる人は 22 名中 12 名と約半数おり、過去にいた人を含めると約 8 割の 17 名になった。

4　タンデムコースの概要

4.1　相手校：獨協大学

タンデムコースを設けるにあたり、相手の大学をどのように探すかがまず問題になった。当時、レーゲンスブルク大学には金沢大学を中心に何校かの日本の大学の協定校があったが、相手校のドイツ語クラスの事情は全く把握していなかった。そこで、ある程度、ドイツ語学習の状況がわかる筆者の母校である獨協大学外国語学部ドイツ語学科に声をかけることにした。声をかけた Wittig 先生が普段タンデムの授業を担当されている Raindl 先生に声をかけ、2017 年夏学期から 3 人でタンデムコースを始めることになった。[8]

4.2　開講学期と時間

タンデムコースは 2017 年夏学期（4 月半ばから 7 月）からこの原稿を執筆中の 2023 年まで毎年夏学期に休まず開講してきている。曜日は月曜日で、夏は時差が 7 時間あるので、ドイツ時間で 10 時 15 分から 11 時 45 分（日本時間は 17 時 15 分から 18 時 45 分）の時間帯に開講している。以前は獨協大学の授業時間の関係で、9 時 45 分からスタートしていたが、時間割が変更になったそうで、現在はレーゲンスブルク大学側としては 2 時限目に当たる 10 時 15 分スタートに落ち着いた。

4.3　参加要件

このタンデムコースのポイントとしては、どちらの大学も単位が出る授業として開講していることである。レーゲンスブルク大学では、元々単位が出ないコースは提供しておらず、単位を出さない授業をするという選択肢がそもそもなかった。また、学生にとっても、ただ参加するだけではなく単位がもらえるのはモチベーションにもつながると考えた。

レーゲンスブルク大学のタンデムコースの正式名称は「Japanisch Tandemkurs」で、A1.2 を修了した学生（2 学期目『みんなの日本語初級』15 課）を参加条件としている。1 学期修了（『みんなの日本語初級』8 課）の学生が参加したことがあったが、文法知識が圧倒的に足りず、会話が成立せずにお互い苦痛に感じて終わってしまったので、それ以降は最低 2 学期を修了した学生のみ参加可能としている。また、このタンデムコースでは 1 人 1 人に特定のパートナーがおり、片方が休むと話し相手がいなくなるため、事前にインターンシップなどで授業に定期的に参加できないことがわかっている場合は、参加を断っている。

授業時間は 2 SWS（90 分 1 コマ）で、出席率 75%をクリアし、発表を行って無事修了すると、3 Credits（単位）もらえる。成績は最終グループ発表を中心に提出

8　獨協大学とはその後、タンデムコースがきっかけとなり、大学同士が 2018 年に協定関係を結んだ。

物によって決まる。また、このタンデムコースでは可能な限り、プライベートでも同じパートナーとタンデムをすることが推奨されている。

獨協大学側の正式名称は「外国語教育特殊演習」で 2 年生（A2.2 以上）から参加可能であり、成績は授業とタンデムへの定期的、かつ積極的参加（授業 20%、タンデム 30%）、ブログへの書き込みや投稿（20%）、発表（30%）となっている。

4.4　授業形態

下記表 2 で、タンデムコースの実施場所を示した。大学のコンピューター室に全員集まって、各自割り当てられたコンピューターでオンラインに接続する場合を「教室」、各自の自宅や大学の教室などからばらばらにオンラインに接続する場合を「自宅」とした。コロナ禍によるロックダウンにより 2020 年から教室に集まることなく、各自が自宅から参加するようになった。

教室で集まって行う授業のメリットとしては、全員同じ教室にいるので、機器のトラブル時などにすぐ対応できることが挙げられる。例えば、ほかのパソコンを使ったり、情報処理センター（Rechenzentrum）の担当者を呼んで、対応してもらったりすることなどが可能だった。

また、日本人留学生のサポーターがいる場合は、うまく活用することができた。留学生サポーターには日本側の欠席者の穴埋め（代理）や、日本語のサポートなどを主に担当してもらっていた。

コンピューター室での授業のデメリットとしては、同じ教室の中だと、ほかの人の声が反響して、相手の声がよく聞こえないということが挙げられる。

自宅などから各自がオンラインで参加する授業のメリットとしては、インターネット環境さえあれば、どこからでも参加できることがある。当日、大学に来なくてもいいので、国外からの参加者もいた。

また、周りの声が邪魔にならないので、会話に集中できるという点が挙げられる。

オンライン授業のデメリットとしては、その日、インターネットの調子が悪いと、授業時間内に回復が見込めず、話ができずに終わることが挙げられる。その場合は、プライベートでタンデムを行ってもらうが、時間を見つけるのが難しく、教師がタンデムの様子を観察できないという問題もある。また、教師や日本人留学生のサポーターがいても、すぐに対応できない。

表 2 のセッションの回数とは共通のオンラインセッションの回数である。括弧内の数字はその中で普段のタンデムパートナーとのやり取りではなく、グループに分かれて行うグループワークを行った回数を示した（グループワークについては 5.3 にて後述する）。

表 2　タンデムコース概要年表

回	実施年	実施場所	デバイス[9]	担当教員	セッション（グループワーク）
1	2017 年	教室	Adobe Connect (Skype)	Wittig, Raindl, 高邑	10 回（0 回）
2	2018 年	教室	Adobe Connect (Skype)	Wittig, 高邑	10 回（0 回）
3	2019 年	教室	Adobe Connect (Skype)	Raindl, 高邑	9 回（0 回）
4	2020 年	自宅	zoom	Raindl, 高邑	9 回（0 回）
5	2021 年	自宅	zoom	Raindl, 高邑	11 回（1 回）
6	2022 年	自宅	zoom	Raindl, 高邑	12 回（1 回）
7	2023 年	自宅	zoom	Raindl, 高邑	12 回（2 回）

ドイツと日本という異なる国、異なる大学が合同で授業をするので、祝日などの関係で、片方の大学だけでの授業になることがある[10]。また、学期の開始・終了時期が異なることもあり、前後に準備日やまとめ日を設けることもある。相手大学が参加できない日は、獨協大学は主に振り返りや準備の時間に当てていることが多く、レーゲンスブルク大学はサポーターである日本人留学生と一緒に活動したり（2019 年まで）、オンラインで読解やビデオ視聴などタンデムとは直接関係のない活動をすることが多い。

4.5　参加人数

参加人数は、2 人ずつのペアになることが前提なので、基本的には先に参加人数が確定した大学に合わせて、相手大学が人数調整をしている。しかし、授業登録の時期や学期の開始時期が異なるので、必ずしもうまくいくわけではない。人数が足りない場合は、教師が学生に直接声をかけて、参加を促しているが、レーゲンスブルク大学は履修登録時期の関係で学期直前にしか参加人数がわからない上に、学期最初の月曜日朝の授業なので、人集めが大変なことが多く、2 週目から参加する学生もいる。また、2019 年は獨協大学側が 2 名多かったので、日本人 2 名対ドイツ人 1 名の 3 名のグループを 2 つ作って、対応した。

また、このタンデムコースの特徴として授業に 2 回以上参加したリピーターが多いことが挙げられる。獨協大学側には見られないが、レーゲンスブルク大学側は計 3 回参加した 1 名を除き、リピーターはそれぞれ計 2 回タンデムコースを履修している。話すテーマに大きな変化はないが、パートナーが変わり、自分のレベルも前回より上がっているので、内容的に繰り返しになってでも、参加する意義が大きいのだろう。

9　2020 年 3 月から始まったコロナ禍によるロックダウンにより、授業は完全にオンラインに移行し、レーゲンスブルク大学が zoom の教育機関ライセンスを取得したことを受け、デバイスも Adobe Connect から zoom に移行した。Adobe Connect では接続に問題が起こることが多く、skype で対応する場合もあったが、zoom に移行してからは問題が起こることが減り、skype を使用することはなくなった。

10　共通のセッションの前後や間に各大学のみで行う回が毎年数回（1〜5 回）ある。

表 3　参加人数の推移

実施回	実施年	参加者数(獨協)	参加者数(レーゲンスブルク)	そのうちのリピーター数(レーゲンスブルク)	日本人留学生サポーター数(レーゲンスブルク)
1	2017年	10名	10名	—	4名
2	2018年	12名	12名	5名	5名
3	2019年	8名	6名	1名	2名
4	2020年	10名	10名	4名	0名
5	2021年	8名	8名	2名	0名
6	2022年	6名[11]	6名	0名	0名
7	2023年	8名[12]	6名	1名	0名

4.6　テーマ

各回のテーマは教師が決めることが多いが、初回にリクエストを聞いて、テーマに盛り込むこともある。このタンデムコースでは授業終了時に、授業アンケートを実施しており、学生からの意見を集めている。下記の表 4 では授業で扱ったテーマの一覧を示し、2020 年、2022 年、2023 年に実施した授業アンケート（資料 2 参照）計 3 回分[13]を元に、それぞれのテーマが回答者 22 名中何名に支持されたかを示した（複数回答可）。2021 年から実施している『若者文化』や 1 度しか実施していない『環境への取り組み』については、今後の学生の反応を見ていく必要があるだろう。

表 4　テーマ一覧

テーマ日本語	テーマドイツ語	実施年（20??年）	支持人数
自己紹介	Selbstvorstellung	17, 18, 19, 20, 21, 22, 23	7名
知り合う	Kennenlernen	17, 19, 20, 21, 22, 23	8名
食文化	Esskultur	17, 19	-
観光	Sightseeing	18	-
祝祭日・イベント	Feiertage, Events	18	-
日本語・ドイツ語での経験	Erfahrungen mit der Zielsprache	19	-
私の町	Heimatstadt/ meine Stadt	20, 21, 22, 23	9名
子供時代	Kindheit	18, 20, 21, 22, 23	14名
学生生活	Studentenleben	17, 18, 19, 20, 21, 22, 23	14名
将来の夢	Zukunftstraum/ Zukunfspläne	17, 19, 21, 22, 23	9名
若者文化(グループワーク[14])	Jugendkultur	21,22,23	8名
環境への取り組み(グループワーク)	Engagement für die Umwelt	23	2名

11　うち 1 名は獨協大学からレーゲンスブルク大学に留学中の日本人学生である。

12　うち 1 名はドイツ、デュースブルク・エッセン大学から獨協大学に留学中の学生で、レーゲンスブルク大学側の人数が 1 人足りなかったので、彼はドイツ語母語話者として、獨協大学の学生と日独タンデムを行った

13　2021 年はアンケートを実施するタイミングを逃してしまい、実施していない。

14　グループワークについては 5.3 にて詳しく述べる。

5　コースの内容

5.1　コースの流れ

初回の授業は全体でのビデオ会議を行い、1 人ずつ目標言語で自己紹介をしている。また、授業開始が相手大学より早く、合同授業の前に時間がある場合などは、大学紹介を行うこともある。初日の自己紹介と質疑応答を踏まえて、希望のパートナーを 3 名まで絞り、リストを提出してもらう。それを元に教師が組み合わせを決定し、2 回目からパートナーとのタンデムが始まる。途中でパートナーの変更はしない。各パートナーとの複数回のセッションやグループワークを経て、発表前の 2 回を発表準備、そして最後の 2 回を全体発表に当てている。

5.2　1 回の授業の流れ

各言語約 35～40 分ずつ交代で事前に決められたテーマ（または各グループが決めたテーマ）について話す。（例：日本語 35～40 分、ドイツ語 35～40 分。またはその逆で毎回交互に設定している）。また、各大学で教師がそれぞれテーマに関するワークシートを作成しており（巻末資料 1 を参照のこと）、レーゲンスブルク大学の場合は、質問項目が並んであり、パートナーからの回答を元に記入していくものである。

教師は各ペア、グループワークの際は各グループのブレイクアウトセッションの部屋を回り、様子を見る。その際、教師はカメラとマイクをオフにしていて、話す必要があるときにオンにしている。教師は基本的には学生同士の会話には参加はしないが、英語で話していたり、日本語の時間にドイツ語を話していたりした際に、発言をして軌道修正を促す。また、語彙の問題などで会話が進まない際には、ヒントを与えたり、口頭だけではなく、チャットを活用して文字で相手に伝える必要性を示すこともある。ほかにも、機器のトラブルやインターネットの問題があった際の対応もする。

コンピューター教室での授業時にサポーターがいた時には、わからない表現などがあると、サポーターにヘルプを求めたりしていた。コンピューター教室で行っていた時は、教師はヘッドセットでそれぞれのグループの会話を聞いているが、ブレイクアウトセッション外のグループの様子はわからないので、サポーターが教室に待機して、挙手などで学生が合図したときに近くに行き、すぐにサポートできるというメリットがあった。

5.3　グループワークの流れ

グループワークは 2021 年から実施しているものである。その日は通常のパートナーとのセッションはなく、まず、パートナー以外のメンバーと 4 人ぐらいのグループになる。グループにはできるだけ日本人とドイツ人を均等に入れ、レベル

も話し合いがうまくいくように教師が調整し、メンバーを決定する。グループではまず、決められたテーマ（例えば、若者文化）についての質問を日本語とドイツ語で 10 ずつ考える。その後、普段のパートナーとは違う相手とペアを組み、先ほど用意した質問を目標言語で問い、回答を集める。最後に元のグループに戻り、結果を報告する。時間は限られているので、課題をこなすのは、なかなか大変ではあるが、普段話せない人たちと話せる貴重な機会になっている

グループワークの日はブレイクアウトのグループを何度も作り直さなくてはいけないので、1 人の教師はグループ作成に時間を取られる。その間、もう 1 人の教師が学生とのやり取りをしているが、もう少しスムーズにグループ分けができるようになれば、待ち時間がなくなって授業時間を有効に活用できるだろう。

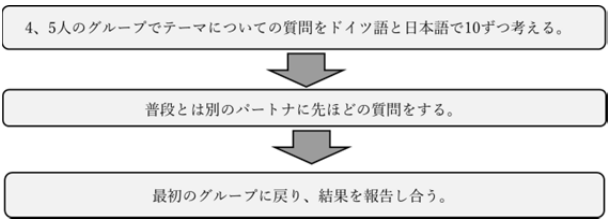

図 1　グループワークの流れ

5.4　発表について

発表は 2 回に分けて全体で行い、それぞれのペアが授業中やプライベートのタンデムで扱ったテーマから 1 つテーマを選び、ドイツ語学習者はドイツについてドイツ語で、日本語学習者は日本について日本語で発表する。ペアで 1 つのパワーポイントを作成し、原稿も用意する。獨協大学側は原稿を暗記して、見ないで発表することが求められているが、レーゲンスブルク大学側はそこまでは求めていない。原稿やパワーポイントは各自が担当するパートを作成し、その後パートナーがチェックすることになっている。ただし、完璧に直しすぎないよう指示している。1 つのペアの持ち時間は参加人数にもよるが、発表約 8〜10 分（1 人 4〜5 分ずつ）＋質疑応答 3〜5 分ぐらいである。

また、ここ数年、発表が終わった後に各回で、2 つか 3 つのグループに分かれ、発表で扱われたテーマについてディスカッションをする時間を設けている。ディスカッションに関する導入の質問は Raindl 先生が事前に考え、筆者が日本語に訳している。

6　タンデムコースに参加する意義

タンデムコースでは、獨協大学とのセッションが一通り終わった学期末に、授業アンケート（資料 2 を参照のこと）を実施している。基本的にはレーゲンスブルク側の参加者全員に実施しているが、コンピューター教室で紙に直接書き込んでもらっていた頃とは違い、現在はオンラインでアンケートを実施しているので、

全員に回答してもらうのが難しい時もある。アンケートの質問及び回答はドイツ語である。

ここでは 2020 年、2022 年、2023 年に行った授業アンケートの結果から、タンデムコースに参加した動機とコースに参加したことで得られたことを紹介する。アンケートに回答したのは、各年に参加した計 22 名である。

動機として挙げられたもので、22 名中 14 名と一番多かったのは「話すことを練習したい」など「話すこと」について言及したものだった。また、「新しい人と知り合いたい（友達を作りたい）」（5 名）や「留学準備として」（3 名）という動機もあった。また「面白そうだから」（1 名）という好奇心から参加した人や「一度参加したときに面白かったから」（1 名）というリピーターの声もあった。

実際にタンデムコースを受講して満足しているかという質問に対しては、「とてもよかった」（10 名）、「よかった」（11 名）、「不満もないが、大満足でもない（In Ordnung）」が 2 名で、概ね満足していると言えるだろう。

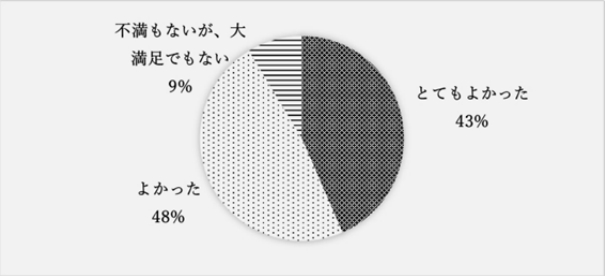

図 2　タンデムコースの満足度

次にタンデムコースでよかったと思うこと（複数回答可）については、多かった順に「習った文法や表現、言葉を使うことができた」（20 名）、「日本語で様々なテーマについて話すことができた」（18 名）、「日本に住んでいるタンデムパートナーができた」（17 名）、「タンデムパートナーと友達になれた」（16 名）、「日本語の授業以外で日本人とコミュニケーションが取れた」（15 名）、「新しい文法や表現、言葉を学ぶことができた」（14 名）、「授業外でタンデムパートナーとコミュニケーションが取れた」（13 名）となった。

この結果を見ると、「日本に住んでいるタンデムパートナーができた」や「タンデムパートナーと友達になれた」といった項目も多くの人に選ばれ、タンデムコースを履修する意義は言語能力向上だけではないことがわかる。

また、タンデムコースによってどの技能が成長したかという質問（複数回答可）には、「聴解 Hören」（21 名）「話すこと Sprechen」（20 名）、「語彙」（14 名）、「作文」（6 名）、「漢字」（3 名）、「読解 Texte lesen」（2 名）の順で多かった。タンデムコースではタンデムパートナーの話を聞き、目標言語で話すことを強いられるので、その二技能が伸びたと実感できるのだろう。

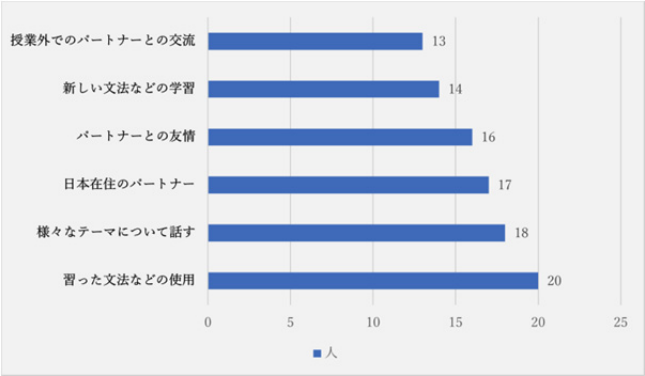

図 3　タンデムコースに参加してよかったこと

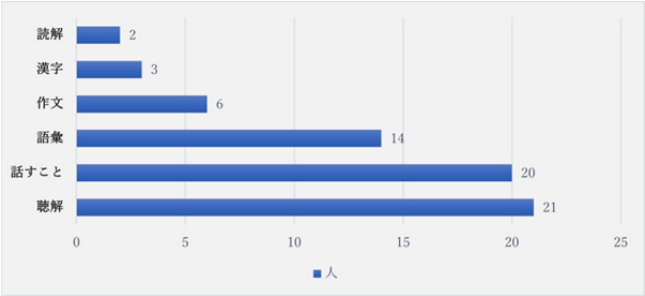

図 4　タンデムコースで成長した技能

7　学生からの意見・要望

ここでは、授業アンケートの結果を基に学生からの意見や要望を紹介する。

7.1　テーマについて

6 ではタンデムコースでよかったこととして「日本語で様々なテーマについて話すことができた」（18 名）というポイントが挙げられた。しかし、「より多くのテーマを」「テーマが少なかった」といった意見もコメントとして書かれていた。また、「テーマを集めたプールを作り、参加者に決めさせる」「テーマのリストを作って、話すテーマがない時に選べるようにしてほしい」などより多くのテーマを求める声があった。ほかにも「自由なテーマで話す回を設けてほしい」や「テーマを投票などで選べるようにするのもゲーム性があって面白いと思う」といった意見もあった。

「興味が持てないテーマがあった。文化についてもっと話せる機会があるとよかった」といった意見や「グループディスカッションのテーマが難しかった。特に言語能力があまり高くない人にとっては、もっと早い段階でテーマについて知らせてもらえると、語彙も調べられるし、テーマについてより積極的にディスカッションに参加できる」といった意見もあった。

7.2　ワークシートについて

ワークシートについては 17 名が回答し、「とても役に立った」（4 名）、「役に立った」（8 名）、「どちらでもない」（4 名）となった。

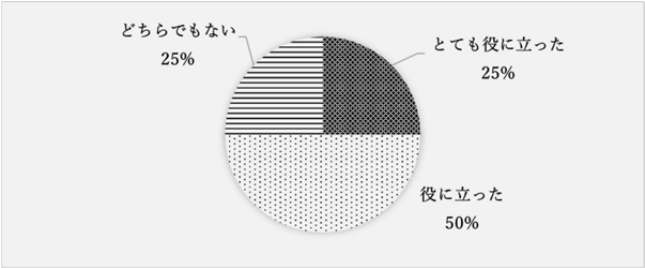

図 5　ワークシートについての意見

具体的には「質問が直接すぎたり、堅苦しすぎる。決められた質問ではなく、質問の例として提案された方がいい」といった意見や「ワークシートは授業日当日ではなく、事前に配布してほしい。獨協大学側は当日配布されることが多く、タンデムの時間に語彙の説明をしなくてはならない」といった意見もあった。

現在 Raindl 先生とは次回に向けて共通のワークシートを作成する話が出ている。今まではそれぞれの大学の学生のレベルが違うこともあり、各大学で用意していたが、どうしても似たような質問があり、同じことを違う言語で 2 回話さなくてはならないといったことがあった。それを避けるためにも、共通のワークシートがあった方がタンデムの時間を有効に活用できるだろうということになったのだ。上記の学生からの意見も踏まえ、新たなワークシートを作成する予定だ。

7.3　タンデムパートナーやグループワークについて

タンデムパートナーとの組み合わせについて「とてもよかった」（19 名）、「よかった」（3 名）と 22 名全員満足していた。

「より多くのグループチャットを」、「もっとグループワークをする機会がほしい」、「いつも同じ相手とタンデムをするのは、安心感があっていいが、グループワークもよかった」、「せっかくたくさんの参加者がいるのだから、ほかの人ともタンデムする機会をもっと設ける」といったより多くのグループワークを求める声もあった。

8.　問題と今後の課題

8.1　タンデムパートナー

タンデムパートナーと話が合わないという不満が出たことがある（1 件）。クラシック音楽ファン（日本側）とアニメ・漫画ファン（ドイツ側）の組み合わせであり、パートナーを決定する際に趣味をもう少し参考にするべきだった。

タンデムパートナーが休んだ場合の対応もいつも問題になっている。コンピュー室での対面時はサポーターが相手になってくれていたが、獨協側はいないので、別のペアに入れてもらうという対応をすることが多い。しかし、発表の準備の際には他のペアの中には入りにくいという問題がある。2021 年は事前にわかっていた場合は相手も休ませたこともあったが、出席率が低くなるという問題もあり、結局ほかのペアに参加させるという対応を取っている。また、2023 年レーゲンスブルク大学は授業に代理で参加する補助要員を 2 名確保し、欠席者の穴埋めを行った。補助要員にはタンデムコースに興味があるが、毎回参加することが難しかったり、ドイツ語母語話者でなかったりという 2 名が担当した。この 2 名は単位はもらえないもののタンデムコースに参加する機会を与えられて、満足していた。

それ以外の問題としては、授業以外のプライベートタンデムをする時間がないということが挙げられる。

8.2　レベル差や言語力

レベル差があると、強い言語に引っ張られやすい。日本語を話す時間なのに、つい相槌がドイツ語になってしまい、ずるずるとドイツ語を話し始めてしまうことがある。また、目標言語よりも英語の方が得意な場合は、英語が出てきてしまうこともある。その場に、教師が居合わせた場合は、すぐに注意しているが、特に学期の最初の頃は全体にも注意を促すことがある。

また、お互いのレベルが低すぎると、会話が成立せず、お互いに苦痛になる。前述したが、レーゲンスブルク大学側で 1 学期のみ修了した学生がそのことを訴えてきたので、次の年から、最低 2 学期修了することを参加条件にした。

グループワークの際、言語力が高い学生の発言が多くなり、同じ言語を学んでいる場合、自信を失う学生もいる。グループワーク中に席を立って、失踪した学生は、その後、授業に来なくなってしまった。また、タンデムパートナーが途中で授業に来なくなるということも過去 2 件あり、最終発表は 1 人で行うことがあった。

8.3　プラットフォームの活用

タンデムコースでは、特定のパートナーとのやり取りが中心なので、グループワークや発表以外では、ほかの学生と交流する機会が少ない。そのため、相手大学や、パートナー以外の学生との交流をより深めるために LMS やブログなどのオンラインプラットフォームを利用することがある。例えば、コース初期に行われる「知り合う」の回の後、自分のタンデムパートナーについて紹介する文をアップし、コメントしてもらうという活動がある。

レーゲンスブルク大学の LMS（Moodle）の活用を試みたこともあったが、獨協大学側の登録に時間がかかり、登録できない学生もいて、うまく活用できずに終わってしまった。

登録の必要がないブログ（WordPress）や Padlet なども書き込みをする学生はあまり多くなく、活発な活動は生まれていない。レーゲンスブルク大学の学生には、そもそも日本語が主専攻の学生はいないので、タンデムコースの単位取得は必須ではなく、自分の専門が忙しいと日本語クラスに時間をかける余裕があまりないという事情もある。

8.4　プレゼンテーション

パートナーがお互いの原稿を作成するのは、禁じているが、どこまで相手の原稿を手直しするかが難しい。訂正を禁止した年は全く意味が通じない発表もあった。また、元の文を直しすぎず、ぎりぎり意味が通じる程度に直すというのは、教師でないと難しく、直しすぎて、当人のレベル以上の表現が多数出てきてしまう。言い慣れない、使い慣れない、そして理解していない表現を本人が作成したものとして発表する意味はあるのか疑問に感じてしまう。

9　まとめ

学生たちはタンデムコースに参加することによって、話す能力や聞く能力、そして、既習文法・語彙の使用や、新しい文法・語彙の学習といった日本語が上達したと実感していた。それ以外に、日本在住のパートナーとのやり取りやパートナーとの友情関係を築くことができたといったことも良かったこととして挙げられた。

また、様々なテーマで話したことが良かったことの 1 つとして挙げられたことや、学生たちがさらに多くのテーマを希望していたことから、パートナーとより多様なテーマについて話すことを学生たちは求めていることがわかった。グループワークのテーマについては、早い段階で告知し、語彙などを調べるなど用意する機会があった方が、より有益な話し合いができるという意見があったので、学期の最初にテーマを公表するようにしていきたい。

また、特定のタンデムパートナーとのやり取り以外にも何度かグループワークを設けてほしいという意見もあったので、グループワークの回数を増やすことも検討したい。

いかに相手と気持ちよく会話ができるかがタンデムの醍醐味なので、今後学生からの意見を参考にテーマやワークシートを改善していく予定である。

また、レベル差が大きすぎたり、会話がうまくはずまない時に、教師ができることは何かを今後も考えていく必要があるだろう。タンデムパートナーの組み合わせを最終的に決めるのは教師なので、パートナーとの会話や関係がうまくいく

かを、初回の自己紹介の段階で考慮したい。また、学生の性格や学習態度などをよく知っていると組み合わせがやりやすいので、教師が普段から学生の様子を観察していくことも必要だろう。授業中の観察はもちろんだが、時間は限られているので、授業前後やそれ以外に個人的に学生と話す機会があれば、主専攻や日本語を学ぶ動機などを聞いたりすることができる。また、時間的に可能であれば、タンデムコースが始まる前に、アンケートを実施し、同じような情報を集めることも可能だろう。

機器のトラブルについては、各自自宅などからオンラインに接続する授業になったので、今後も避けられない問題になるだろう。なるべくインターネット環境が安定しているのが望ましいが、急なトラブルは誰にでも起こりうるので、その際にどう対応するかを考えていく必要がある。

また、インターネット環境だけではなく、相手の欠席時にどう対応するかも獨協大学側とすり合わせ、相手が欠席しても授業に参加できる体制を整えていくことが必要だろう。

プラットフォームについては、レーゲンスブルク大学の学生も積極的に参加したくなるような使い方を考えていく必要があるだろう。

プレゼンテーションでは、自分の力で表現できることと、相手に直してもらった際のレベル差をどうするか。ほどよい添削は日本語教育やドイツ語教育を専門に学んでいないと、難しいので、今後もどうするのが一番いいのか考えていきたい。

謝辞

本稿は 2022 年 2 月にオンラインで開催された第 9 回 JaF-DaF フォーラムにおける発表「日独タンデム授業—実践報告と今後の課題」をもとに執筆したものである。タンデム授業のきっかけを作ってくださり、成果を発表するようお声をかけてくださった神戸大学の林良子教授とハンブルク大学の杉原早紀先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。また、第 1 回のタンデムコースから今まで獨協大学の Marco Raindl 先生には、コースを牽引してもらい、教師としてたくさん学ぶことがありました。この場を借りて、御礼申し上げます。最後に、根気よくコメントをくださり、本稿をより良いものにしようと多大なる力添えをくださった査読の方々、そして編集委員長の加藤由実子さんに感謝の意を表します。

【参考文献】

大河内朋子 2011.「タンデムプロジェクトの実践報告ーコース設計とその成果」『大学教育研究　三重大学授業研究交流誌』第 19 号, 1–6.

小西正恵 2021.「ビデオチャットでのイータンデム・オンライン国際交流におけるコミュニケーションのための協働」『外国語教育メディア学会機関誌』第 58 号, 43–67.

小林浩明 2016.「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』14号, 135–145.
佐藤ブリューゲル敬子 2019.「Moodle を使用した日独メールタンデムプロジェクト（実践報告）」『Japanisch als Fremdsprache』Vol. 6, 23–40.
高邑ツォルネック真弓 2021.「ドイツ語圏の大学における会話教育の実態―教師に対するアンケート調査から」『Japanisch als Fremdsprache』Vol. 7, 47–67.
浜津大輔 2019.「ハレ・ヴィッテンベルク大学日本学科におけるオンライン・タンデム・プロフェクトの報告」『Japanisch als Fremdsprache』Vol. 6, 119–130.
林良子 2015.「グローバル時代の外国語教育と情報発信－ICT を用いた縁覚共同授業の実践を通して」『コンピュータ＆エデュケーション』39 号, 32–38.
林良子・杉原早紀・Trummer-Fukada, Stefan 2013.「スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンデム授業の実践」『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』第 41 号, 44–54.
宮下博幸 2016.「ドイツ語と日本語のタンデム学習の試み―成果と今後の課題」『言語教育研究センター研究年報』関西学院大学, 19 号, 141–150.
脇坂真彩子 2013.「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』第 25 号, 1–31.
脇坂真彩子 2016.「日本とドイツの大学生による E タンデム―インターネットを介した学習者同士の学び合い」『ことばと文字』第 6 号, 88–97.
Bechtel, Mark 2003. *Interkulturelles Lernen beim Sprachenlernen im Tandem: Eine diskursanalytische Untersuchung*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, 15–17.
Brammerts, Helmut 2001. Autonomes Sprachenlernen im Tandem: Entwicklung eines Konzepts. In: Brammerts, Helmut/ Kleppin, Karin (Hg.) *Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem Ein Handbuch*. Tübingen: Stauffenburg Verlag, 9–16.
Brammerts, Helmut 2006. Tandemberatung. *Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht* 11 (2): 1–16. https://zif.tujournals.ulb.tu-darmstadt.de/article/id/2635/（2023 年 12 月 28 日）

【資料 1】ワークシート例「将来の夢」（注：漢字には振り仮名が振ってある）

1. タンデムパートナーは大学を卒業したら、すぐに働きたいですか。それとも、まず何か違うこと（旅行、留学、ボランティアなど）をしたいと思っていますか。
2. どんな所で働きたいと思っていますか。（会社の名前や会社の種類など）
3. そこでどんなことをしたいですか。（仕事の種類）
4. その将来の夢は、今大学で勉強していることと関係がありますか。
5. その仕事をするために、今何か準備していますか。

【資料 2】授業アンケート　例）2023 年夏学期分（原文：ドイツ語、訳：筆者）

1. Haben Sie zurzeit einen Tandempartner außerhalb des Tandemkurses?
   今、タンデムコース以外でタンデムパートナーがいますか。（「はい」か「いいえ」で回答）
2. Wie viele Tandempartner haben/ hatten Sie bis jetzt? (Außerhalb des Tandemkurses)
   今までタンデムコース以外で何人タンデムパートナーがいましたか。（人数を回答）
3. Wie lange haben Sie mit den obengenannten Tandempartnern Tandem gemacht? Wenn Sie mehrere Tandempartner hatten, bitte fassen Sie die Gesamtzeit (Jahre, Monate) zusammen.
   上記に挙げたタンデムパートナーとどのくらいタンデムをしましたか。複数のパートナーがいた場合は、合計（年、月）を書いてください。
4. Wie oft haben Sie sich mit den obengenannten Tandempartnern getroffen? (ungefähr __Mal pro Woche)
   上記のタンデムパートナーと週に約何回会っています・いましたか。
5. Besuchen Sie den Japanisch Stammtisch?
   毎週木曜日に開催されている日本語交流会に参加したことがありますか。
6. Haben Sie außerhalb des Tandemkurses Gelegenheit sich mit Japaner zu unterhalten?
   タンデムコース以外で日本人と話す機会がありますか。
7. Warum wollten Sie diesen Tandemkurs besuchen?
   タンデムコースを履修した理由は何ですか。
8. Wie war der Tandemkurs?
   タンデムコースはどうでしたか。（5 段階のうち 1 つ回答）
9. Wie finden Sie die Kombination mit Ihrem Tandempartner?
   タンデムパートナーの組み合わせはどうでしたか。（5 段階のうち 1 つ回答）
10. Was war beim Tandemkurs gut? (mehrfachauswahl möglich)
    タンデムコースでよかったことは何ですか。（複数回答可）
    a. Ich habe einen japanischen Tandempartner, der in Japan wohnt.
    日本に住んでいる日本人のタンデムパートナーができたこと。
    b. Ich konnte mit meinem Tandempartner außerhalb des Unterrichts kommunizieren.
    タンデムパートナーと授業以外でもコミュニケーションを取れたこと。
    c. Ich konnte mit meinem Tandempartner Freundschaft schließen.
    タンデムパートナーと友達になれたこと。
    d. Ich konnte außerhalb des Japanischkurses mit Japaner kommunizieren.
    日本語クラス以外で日本人とコミュニケーションを取れたこと。
    e. Ich konnte mich über verschiedene Themen auf Japanisch unterhalten.
    様々なテーマについて日本語で話すことができたこと。

f. Ich konnte gelernte Grammatik, Ausdrücke oder Vokabeln verwenden.
習った文法や表現、語彙を使うことができたこと。
g. Ich konnte neue Grammatik, Ausdrücke oder Vokabeln lernen.
新しい文法や表現、語彙を学ぶことができたこと。

11. Welcher Bereich hat sich durch den Tandemkurs weiterentwickelt? (Mehrfach-Auswahl möglich)
タンデムコースによってどの能力が伸びましたか。
Sprechen 話す・Hören 聞く・Text Lesen 読解・Text Schreiben 作文・Kanji 漢字・Vokabeln 語彙・Sonstiges その他
12. Welche Kommunikationsmittel waren für Sie am praktischsten, wenn Sie mit Ihrem Tandem-Partner außerhalb Unterrichts kommuniziert haben?
授業外でタンデムパートナーとやり取りする際に、一番便利だった手段は何ですか。
Zoom・LINE (Chat)・LINE (Anruf)・Instagram・E-Mail・その他
13. Welches vorgegebene Thema fanden Sie interessant? (Mehrfach-Auswahl möglich)
提示されたテーマの中で一番面白かったのはどれですか。(複数回答可。表4参照)
14. Welches Thema fanden Sie im gesamten Tandemkurs (auch außerhalb des Unterrichts) am interessantesten?
授業外も含めて、タンデムコースの中で一番面白かったテーマは何ですか。
15. Wie finden Sie das Referat?
発表はどうでしたか。（5段階のうち一つ回答）
16. Was kann man noch verbessern?
タンデムコースの改善点を教えてください。
17. Wenn Sie noch weitere Wünsche oder Kommentare haben, schreiben Sie sie bitte unten hin.
それ以外に希望やコメントがあったら、下に書いてください。